

<b>Title</b>	ネット不安尺度の試作：インターネット利用状況との関連の分析
<b>Author</b>	中山, 満子
<b>Citation</b>	大阪市立大学学術情報総合センター紀要. Vol. 7, p.1-4.
<b>Issue Date</b>	2006-03
<b>ISSN</b>	1345-4145
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学学術情報総合センター
<b>Description</b>	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

## ネット不安尺度の試作：インターネット利用状況との関連の分析

中山 満子<sup>†</sup>

インターネットに対して抱く不安感や否定的態度をネット不安と呼ぶ。本研究では、ネット不安尺度を試作するために、大学生 82 名を対象にした質問紙調査を行った。調査の結果、「トラブル・不安」因子、「非効力感」因子、「コミュニケーション・対人関係」因子の 3 因子が得られた。またインターネット利用状況と因子得点との関連を分析した結果、おおむね利用時間が長く様々なツールの利用頻度が高いほど、不安傾向が低いことが確認された。

キーワード：インターネット、ネット不安、質問紙調査

## Preliminary Study for Internet Anxiety Scale: the Analyses of Relationship between Internet Anxiety and Internet Use

Michiko NAKAYAMA<sup>†</sup>

Anxiety using Internet or negative attitude for Internet is referred to as Internet Anxiety. The purpose of this study was to construct the Internet Anxiety Scale. Eighty two university students completed an Internet Use Survey and an Internet Anxiety Questionnaire. The factor analyses yielded three-factor structure of Internet Anxiety: anxiety for trouble, efficacy, and communication. Moreover, it was founded that the students using Internet longer and more frequently are less likely to feel anxiety for Internet.

Key Words : Internet, Internet anxiety, questionnaire

### 1 はじめに

日本でも、平成 17 年度にはインターネット普及率が 60%をこえた（総務省，2005）。その一方で、デジタルデバイド問題も数多く提起されており、学歴、収入、地域、職業によるデバイドの存在が報告されている（例えば、直井・菅野・岩淵，2003）。

筆者はこれまで電子掲示板への態度について研究を行ってきたが（中山，2005ab）、その中でインターネット非利用者あるいはインターネットに対して消極的態度を有する人の心理特性について関心を持つ

ようになった。社会階層という視点ではなく、心理学的視点から非利用者の特性について考えてみたい。

### 2 消極的利用者へのインタビュー

平成 17 年 11 月に、大阪市立大学学生 4 名に対してインタビューを行った。対象者は、大学を通じて行ったアルバイト募集に応募した男性 2 名、女性 2 名である。募集に際しては、「インターネットを積極的に利用していない人（授業などで必要があつて利用するのは除く）」という条件をつけ、心理状態などの内面を語ってもらうインタビューであることを説

<sup>†</sup> 大阪市立大学学術情報総合センター・創造都市研究科

明の上、参加してもらった。1名は個別、3名はグループインタビューの形を取った。

インタビューでは、なぜインターネット利用しないのかということを中心に話を聞いた。ここでは詳細は述べないが、環境的要因（自宅のインターネット接続環境）から自己の内面に至るまで様々な理由が挙げられた。その中で筆者の印象に残ったのが、「コンピュータウイルスが不安」「知らないで悪質な有料サイトに迷い込んでお金を請求されるのが心配」というようなインターネットに対する不安感の訴えであった。

80年代後半から90年頃にかけて、さかんに「コンピュータ不安」の研究が行われた時期があった。コンピュータ不安とは、コンピュータ（操作）に対する消極的・否定的・回避的な態度のことである。現在の若年層にとってパソコンは身近な機械になり、少なくともパソコン操作のレベルでは不安感が生じるということはないようである。

インターネットに関しても、日常的に利用している人間にとってはホームページの閲覧やメール利用が不安や緊張を生じるということはない。しかし、非利用者・消極的利用者にとっては、「よくわからない世界」「何が起こるかかわからない世界」なのかもしれない。このようなインターネットに対する漠然とした不安感、消極的態度を「ネット不安」と呼ぶことにする。

本稿では、ネット不安を測定する尺度を試作するための調査結果について報告する。さらにインターネット利用状況とネット不安の関連について分析したので報告する。

### 3 質問紙調査

#### 3.1 方法

##### 調査日時、調査対象者

調査は平成17年11月に大阪市立大学学生86名を対象とし、情報処理関連科目の授業時間内に集団で実施した。そのうち年齢の高い2名と年齢不明の2名を除き、82名分を分析対象とした。分析対象の平均年齢は20.37歳（範囲19-29）、男50名、女31名、不明1名であった。

##### 調査項目

調査項目は、性別、年齢、及びインターネット利

用時間、電子(PC)メール利用頻度、携帯メール利用頻度、ホームページ閲覧頻度、掲示板閲覧頻度、掲示板書き込み頻度と、ネット不安測定項目35項目であった。

ネット不安尺度は、コンピュータ不安尺度（小川・浅川、1991）、愛教大コンピュータ不安尺度（平田、1990）を参考に、不安・緊張、嫌悪・回避、非効力感（有能でない、自分の思うようにできないなどの感覚）、テクノロジー不安の因子を仮定し、インターネットに当てはまるように作成した。さらにインターネット行動における状況シャイネス、自己開示不安の因子も仮定し、35項目を作成した。

### 3.2 結果

#### 3.2.1 因子分析

ネット不安測定項目35項目について、不安が高いほど得点が高くなるように得点を反転した後分析を行った。まずG-P分析を行った。各項目について、得点の上位12名、下位12名の平均値の差、および得点分布を参考に、得点に極端に偏りのある項目を削除し、上位の得点と下位の得点に明らかに差がみられる22項目を選択した。

この22項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。結果のスクリープロットから3因子構造が妥当と判断し、3因子に設定して再度分析した。さらにどの因子にも負荷の高くない1項目を削除し、再度3因子構造の因子分析を行った。

得られた3因子について因子ごとに内的一貫性を表す $\alpha$ 係数を算出した。第1因子（9項目）は、 $\alpha = .849$ であり十分に高かった。第2因子は、7項目で $\alpha = .788$ 、1項目を削除して6項目で $\alpha = .815$ であったので、6項目を採用する。第3因子（5項目）は、 $\alpha = .724$ であった。

これらの結果から20項目を採用して再度3因子を仮定した因子分析を行った結果、Table 1に示すような因子負荷量が得られた。第1因子は「トラブル・不安」、第2因子は「非効力感」、第3因子は「コミュニケーション・対人関係」と命名する。

#### 3.2.1 利用状況との相関

次に、インターネット利用状況（時間や頻度）と因子との関係を調べた。今回の調査対象者は、情報処理関連科目の受講生であり、既にインターネット

利用経験のある大学生ばかりである。従ってこの研究が本来対象とするインターネット非利用者ではないが、今回は探索的にインターネット利用状況とネット不安との関係を調べてみることにした。また利用状況とネット不安との関係モデルを仮定した調査を行ったわけではないので、現時点では単純な相関分析のみを行った。

各因子に該当する項目（第1因子9項目、第2因子6項目、第3因子5項目）の点数を単純合計したものを、各因子の得点とした。

Table 1 因子負荷量  
(★は反転項目)

	因子		
	1	2	3
危険にあいそうで不安	.860	.023	.160
トラブルに巻き込まれそう	.851	.232	.008
悪質サイトが心配	.644	.143	.273
プライバシー暴露の不安	.641	.044	-.109
ウィルスの心配	.573	.069	-.118
急速な普及への不安	.491	.323	.114
ネット依存社会はおかしい	.457	.258	.131
過剰利用はよくない	.446	-.012	.423
利用しようとする不安	.419	.304	.084
インターネットがわからない	.344	.690	.155
手順がはっきり認識できる★	.050	.675	.098
適切に利用できる★	.153	.668	.094
コンピュータ動作が予測可能★	.481	.551	-.091
インターネットに親しみ★	.130	.509	.242
解説書が理解できる★	.259	.508	.341
いいたいことが伝えられる	-.051	.153	.655
知り合いが増えるのが楽しい★	.012	.394	.544
ネットで友人を作りたいくない	.038	.480	.501
発言するのに勇気がいる	.161	-.012	.500
匿名で発言できるので気楽★	-.110	.313	.431

### 利用状況の概要

週当たりの利用時間は、1～5時間が最も多く半数近くになる。10時間～20時間以内、20時間以上の回答は少なかったため、これをあわせて、1時間以下/1～5時間/5～10時間/10時間以上の4段階に再コーディングした。

PCメール利用頻度は、「たまに利用する」が最も多く、半数近くになる。週数回と毎日をあわせて、利用しない/たまに利用する/週数回以上の3段階に

再コーディングした。

携帯メールについては、90%近くが毎日利用すると答えた。以降の分析は行わなかった。

ホームページ閲覧は、ほぼ毎日という回答が最も多く、半数近くである。ほとんど見ない比率が低かったため、週1～2回とあわせて、週1～2回以下/週数回/ほぼ毎日の3段階に再コーディングした。

電子掲示板閲覧頻度は、週1～2回が一番多く、約半数である。ホームページ閲覧同様にほとんど見ない比率が低かったため、週1～2回とあわせて、週1～2回以下/週数回/ほぼ毎日の3段階に再コーディングした。

電子掲示板書き込み頻度は、書き込んだことがないが最も多く半数を超える。頻繁に書き込む人は少なかったため、書き込んだことがない/たまに書き込む/週1～2回以上の3段階に再コーディングした。

### 相関分析

再コーディングした利用状況（時間、頻度）と各因子の得点との相関をTable2に示す。

Table 2 ネット利用状況と因子との相関係数

	* P<.01		
	因子		
	1	2	3
ネット利用時間	-0.40*	-0.46*	-0.22
メール頻度	-0.29*	-0.50*	-0.47*
ホームページ閲覧頻度	-0.20	-0.43*	-0.33*
掲示板閲覧頻度	-0.15	-0.34*	-0.44*
掲示板書き込み頻度	-0.21	-0.43*	-0.48*

分析の結果、全体としては利用状況と不安の間に負の相関が見られ、利用が長時間あるいは頻繁な人ほど不安が低いことが確認された。

ネット利用時間は、第1、第2因子との相関が有意であった。また、電子メール利用頻度は3因子ともに有意な相関が見られた。一方、ホームページ閲覧頻度、掲示板閲覧頻度、掲示板書き込み頻度は、第1因子との相関は有意ではなく、第2、第3因子のみ有意であった。

## 4 考察

本研究では、インターネットに対する不安感や消

極的態度である「ネット不安」の存在を仮定し、尺度を試作した。今回の調査からは、ネット上のトラブルへの不安やネット社会への不安などの「トラブル・不安」因子、手順や操作へ不安である「非効力感」因子、ネット上のコミュニケーションや対人関係への評価である「コミュニケーション・対人関係」因子の3因子構造が妥当であると考えた。

次に、インターネット利用状況と各因子の得点(単純合計得点)との相関を分析した。利用時間は、第1因子(トラブル・不安)、第2因子(非効力感)との相関が有意であった。また、電子メール利用頻度は3因子ともに有意な相関が見られた。一方、ホームページ閲覧頻度、掲示板閲覧頻度、掲示板書き込み頻度は、第1因子との相関は有意ではなく、第2因子(非効力感)、第3因子(コミュニケーション・人間関係)のみ有意であった。

インターネットで利用されるツールは、おおまかには電子メールとホームページ・掲示板に分けられる。第1因子は、ネットに過剰に依存する社会への不安や、ネット上での様々な危険やトラブルへの不安であるが、今回の調査対象者の得点は1~5の5段階で平均3点以下であり、全体として不安が低い。

PCメールについては追加分析として、因子スコアを従属変数、利用頻度を独立変数として分散分析を行うと、人数に偏りがあって有意にはならないが、毎日PCメールを利用する人のみ、第1因子の因子スコアが他に比べて低い傾向が見られる( $P=0.05$ )。大学生の間では親しい友人とのコミュニケーションは携帯メールで行うことが主流であることを考えると、PCメールは主として道具的 목적으로利用されていると思われる。毎日PCメールを利用する人は、道具的にインターネットを利用しており、インターネットを信頼している、あるいは自信をもって利用しているということが言えるかも知れない。

これに対して、ホームページや掲示板の利用状況と第1因子は関連が有意ではなかった。危険やトラブルへの心配は、ホームページや掲示板利用でも生じると考えられるので、今後インターネット非利用者や消極的利用者を対象とした研究を行って確認する必要がある。

第2因子は、操作手順がわからない、適切に操作できないなどの非効力感、第3因子は、インターネットを利用したほうが言いたいことを伝えられる(反転項目)、インターネット上で知りあいが増える

のが楽しい(反転項目)などのコミュニケーション・対人関係への評価因子である。両因子については、すべてのツールとの相関がみられた。インターネット上で利用頻度の低い人が、非効力感を強く持ち、インターネット上のコミュニケーションや人間関係に対する評価も低いことが確認された。

最後に今後の課題と展望について述べる。まず、繰り返し述べているように、今回の調査対象者は情報処理科目を受講している大学生であり、本来の研究の目的であるインターネットに消極的な人、利用していない人とはかなり異なっていた。しかし授業でコンピュータを利用している大学生であっても、インターネットに対する態度や感じ方はかなり様々であると思われる。そのため、今回は利用状況と因子との関係についても分析を試み、ある程度整合性のある結果が得られている。ただし、ネット利用時間は、ホームページ閲覧時間にもっとも影響されると考えられるにも関わらず、相関分析の結果はネット利用時間とホームページ閲覧頻度で異なっているなど、理由が今回の調査からだけでは不明な点もある。尺度の妥当性の検討、及び他の要因との関連について、今後さらに研究を行う必要がある。

#### 謝辞

調査にご協力いただいた、大阪市立大学経済学研究科橋本文彦助教授に感謝いたします。

#### 引用文献

- 平田賢一(1991) コンピュータ不安の概念と測定. 愛知教育大学研究報告 39 (教育科学), 203-212.  
 直井優・菅野剛・岩淵亜希子(2003) 情報化社会に関する全国調査(JIS 2001)の概要. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 29, 23-66.  
 中山満子(2005a)電子掲示板に対する態度の測定(3) 第10回社会情報学会全国大会  
 中山満子(2005b)電子掲示板に対する態度の測定(4) 日本社会心理学会第46回大会  
 小川亮・浅川伸一(1991) コンピュータ不安の測定の試み(6) -大学生用コンピュータ不安検査の標準化- 教育工学関連学協会連合第3回全国大会論文集, 587-588.  
 総務省(2005) 情報通信白書(平成17年版)